

対位法楽曲の鑑賞と創作の一体化

—ICT を活用した実践—

齋藤 竜夫

早川 克善 (燕中学校教諭)

はじめに

新潟中央短期大学では幼児教育の専門家を養成するために必要な音楽系の科目として「音楽表現」「ピアノ表現」また教養科目として「音楽概論」がある。それらを通して歌唱・器楽・鑑賞の能力を涵養している。しかし短期大学入学前までの音楽的な経験が不足しており、多様な音楽形式への対応力が不足している。そこで今回、燕中学校教諭の早川氏と共同研究を行い多様な音楽への対応について継続的に研究していくこととなった。本論では早川が授業実践を行い、齋藤が作曲理論的な面から論じた。本論で取り上げるのは対位法楽曲の鑑賞・創作である。

平成20年に施行された学習指導要領の中学校音楽科では、表現及び鑑賞に関する能力を育成する上で必要となる共通事項が新設された。これにより、「表現」と「鑑賞」の一体化を図った指導が求められるようになった。平成29年3月に公示された新学習指導要領でも、同様の趣旨で共通事項は位置づけられており、歌唱・器楽・創作・鑑賞の学習を支えるものとしている。また、音楽の構造についても、表現活動と関連付けながら学習することが求められている。

そこで、表現活動の中の創作によって、音の重なり方や反復、変化、対照などの構成上の特徴を理解させ、それらと関連付けながら鑑賞活動することで、音楽に対する理解を一層深めることができるはずである。

I 研究仮説

鑑賞教材と関連させた創作活動を行い、対位法で書かれた曲を比較鑑賞や楽曲分析をすることで、楽譜から得た情報をもとに、旋律やテクスチュアを意識しながら曲を聴くことができるであろう。

II 対位法の概観

対位法(英: counterpoint, 独: Kontrapunkt, 仏: contrepoint)の語は、punctus contra punctus から変化したものである。Punctus contra punctus は点对点ということであり、つまり音符対音符のことである。現在では旋律線と、それらの累積に関する技法と定義される。対位法という語をポリフォニーと同義に捉えられることがあるが、本来ポリフォニ

一とは多声という意味でホモフォニー（単声）の対概念である。つまり対位法とはポリフォニー音楽の一つの様式であると言える。また一般には対位法の対概念は和声学ということになる。水平的な音響と垂直的な音響という二つの音楽認識上の大きな特長について、つまり和音に対する考え方の違いについてイエッペセンは

「和声音楽にあっては和音は所与のものであり、論議の余地のないものであることを前提としている。われわれはそれを受容し、そこから和音連結の法則や緊張力の内的状態に関する法則を引き出そうと試みる。対位法音楽では事情は全くちがっている。われわれは和音からではなく旋律線から始める。ここでは和音は要求によってではなく受動的に生まれたものである」

と端的に非常に分かりやすく述べている。

対位法の歴史的な発展を概観すると15世紀に大きく発展し、その確立を見たといつてよいだろう。オケゲム（Ockeghem）、デュファイ（Dufay）、ダンスタブル（Dunstable）らの作品が有名である。16世紀はポリフォニー音楽の黄金時代であり、その頂点はローマ学派の巨匠パレストリーナ（Palestrina）である。17世紀は前世紀の遺産の継承・発展といえる。18世紀はバッハ様式ともいえるが、16世紀の対位法に対する考え方と大きく異なり、それはごく簡潔に言えば和声的な音楽的思考の発展にある。

今日の作曲技法における対位法でもっとも重要な作曲家は間違いなくJ.S.バッハ（以下バッハ）である。古典派、ロマン派のみならず20世紀の新ウィーン学派の作曲家たちにとっての対位法的な基準はバッハにあった。バッハにおける対位法技法の最大の特徴はそこにはっきりと和声的な思考（通奏低音）が存在することである。それについてイエッペセンは

「パレストリーナは線から出発し和音に至る。バッハの音楽では、時に声部が非常に大胆に独立性を保持しつつ発展していくのに驚かされるのであるが、実は背後にかくされている和声構造に従属しつつ生成しているにすぎない」

と述べ小鍛冶は

「バッハの音楽には、中世からルネサンス、初期バロックの伝統的対位法の継承とともに、調性和声にもとづく通奏低音法（バツソ・コンティヌオ）の新たな基準化がみられる。バッハの音楽とは、通奏低音法による調的機能を前提とした主題的多声法としての対位法の新たな発展段階であるといえよう」

と述べているし、また長谷川は

「十五・六世紀の声楽ポリフォニーとも、また、十七世紀の作風とも異り、バッハなどの音楽は、原則として、調性が明瞭である。

即ち、音階は、長調と、ドーリア式短調（旋律的短調）とが用いられる」

と述べている。

対位法を修めようとする者はパレストリーナ様式とバッハ様式に習熟する必要がある。

Ⅲ 多声音楽の聴取について

小・中学の鑑賞教材において、多声音楽が取り上げられる場合バロック期の楽曲が選ばれることが多い。ヴィヴァルディ、ヘンデル、バッハなどである。それ以前の音楽が取り上げられないもっとも大きな理由は調性感の欠如にあると考えられる。現代のポピュラー音楽は調性機能をもととしており、その意味で調的機能が発展したバロック期の音楽はそれ以前と比べてはるかに耳に馴染む。多声音楽に初めて触れるにはバロック期の音楽のほうが向いていると言える。

また今回鑑賞教材として選ばれたフーガという楽曲形式は聴取においてある種の困難さがある。というのもフーガは定型的な、規範的な形式形成ではなく、曲の主題やエピソードが自立的に発展・展開していく特徴があり、きわめて定型的なポピュラー音楽に慣れた耳には統一的な楽曲の聴取は難しいと言えるのである。

Ⅳ カノンとフーガについて

今回の実践において取り上げられたカノンとフーガについて、ここでは簡潔に概観する。また聴取や創作における注意点もここで論述する。

カノンは授業で取り上げられた輪唱（カエルの合唱）がそのもっともシンプルな形であり、先行声部の旋律を、追行声部が模倣することによって生まれる楽曲のことであり、おむね次の種類がある。

並行（順行）カノン

追行声部が先行声部の旋律に並進行して模倣する

反行（反転）カノン

追行声部が先行声部の旋律に反進行して模倣する

拡大カノン

追行声部が先行声部を模倣する際、音符を拡大して模倣する

縮小カノン

拡大カノンの逆

今回の創作実践で使用された技法は上記のものであるが、そのほかに逆行カノン、逆比例のカノンなどがある。

フーガはバロック期に完成された形式であり、最も重要な作品を多数作曲したのがバッハである。その特徴は「きわめて調性的な形式性を基調とし、時に多少の破調をも含む」（長谷川）「変化を含んだ統一あるいくつかの段落を、編合して一つの形体を作り出すという形

式ではない」「常に継起的に連続し、しかも絶えず、唯一の主題が、いずれかの声部で奏される」(石桁)ということである。

聴取する際の注意点として、フーガは限定された声部を遵守すること、一斉に演奏が始まるのではなく、一声ずつあらわれることにある。

V 研究内容与方法

第2学年の鑑賞教材「小フーガ」において、鑑賞の途中に動機を生かした旋律をつくる創作活動を行い、再度鑑賞したときの生徒の感想から、研究仮説についての検証を行う。

1 聴覚情報から対位法として「小フーガ」を聞く

「小フーガ」を鑑賞し、映像を見ながらパイプオルガンの音色や、楽器の構造を理解する。次に、主題に着目し、対位法的な視点から「小フーガ」を鑑賞する。フーガは主題が追いかけるように現れることを確認した後に、カエルの合唱をする。カエルの合唱もフーガと同じく主題を追いかけることが特徴であるが、厳格に模倣していて、フーガは主題以外の旋律が出てくることを理解させる。まとめとして、フーガの重要な要素が“旋律”であることを確認し、次の創作活動へ繋げる。

2 「小フーガ」の動機を生かした創作活動

創作教材である「動機を生かした旋律をつくろう」の活動を鑑賞間に行い、バッハが多く曲で用いている対位法的手法である、主題の模倣(本教材ではシフトとする)、反復、逆行、反行、縮小、拡大を、創作活動を通して理解させる(本教材では反行を扱っていないが、バッハの作品では反行が多く使われているために、反行も加えることにした)。ここでは、「小フーガ」の動機(ここではG、D、B、Aの4音)を用いることで、鑑賞教材と関連づけながら創作活動を行えることを期待する。

また、早川はこれまで、創作活動の際には、キーボードやリコーダーを用いながら、音を確かめながら活動をさせてきた。しかし、一部の生徒を除いて、自分の書いた楽譜通りに演奏できないという、技能面の問題が生じてきた。そこで、本実践では楽譜作成ソフトである「MuseScorePortable」を活用することで、これらの問題の解決を試る。

3 対位法で書かれた曲の比較鑑賞と楽曲分析

動機の変化のさせ方に着目させるために、「蟹行カノン」を鑑賞する。その後、楽譜を提示し、この曲が創作活動で活用した逆行によって構成されていることを理解させる。次に「インベンションI」を鑑賞する。楽譜を見ながら、2声に渡って現れる旋律が、動機をどのように変化してできた旋律なのか楽曲分析を行う。楽譜を見ながら楽曲分析を行う活動を始めて行うため、グループで対話しながら分析する時間も設定する。最後に「小フーガ」を、楽譜を見ながら鑑賞する。楽譜に対して苦手意識をもっている生徒でも、創作活動と比較鑑賞によって習得した知識を活かしながら、「小フ

ーガ」を耳からの情報だけでなく、楽譜による視覚的情報によってもフーガが多声部による旋律の模倣で構成されていることに気付けることを期待する。

VI 研究の実際（燕市立燕中学校 2年3組 平成29年11月実施）

1 聴覚情報から対位法として「小フーガ」を聞く

初めに映像を見せずに、パイプオルガンについて考えさせた。楽器名は約半数の生徒が知っていた。ところが「この曲は何人で演奏しているのでしょうか」という問いに、3～4人で演奏していると考えた生徒が、学級の半数近くいた。理由として「高い音や低い音が順番に聞こえたから」と答える生徒もいた。このことから、生徒は声部の重なりを、無意識に感じ取っていたものと考えられる。次にフーガが旋律の模倣によって構成されることを知覚させるために、第1部で何回主題が出てくるかを考えさせた。8割の生徒が4回と答えたが、5回以上と考える生徒もいたため、曲を聴きながら主題が現れるところを挙手させながら、全員で確認することにした。ソプラノに現れる主題（1小節目）とアルトに現れる応答（5小節目）では、全員が挙手することができた。次に主題が現れるのは12小節目の3拍目であるが、11小節目で挙手した生徒が2人いた。アルトに応答が現れるところでは、主題の3つめの音（Fの音）が聞こえたところで、生徒たちは挙手をしていた。しかし、11小節目で挙手をした2人は、小節目に入る直前で挙手をしていた。この反応から、次のようなことが考えられる。生徒は第1部では主題がト短調、応答がニ短調で提示されることを知らない。さらに、調性感覚がない生徒が10小節目の旋律から、続く旋律がどのような調になるのかは予測できない。実際、11小節目で主題が提示される場合は、イ短調で提示されるはずである。つまり、生徒は主題に続いて応答が現れたことを理解し、応答の旋律に続いて主題が再び現れるものだと考えたと思われる。この生徒の反応から、聴覚だけに頼る鑑賞授業では、フーガの調性的な形式性を理解させるのは極めて困難であることがわかった。

2 「小フーガ」の動機を生かした創作活動

創作活動の1時間目は、創作活動とそれに続く鑑賞活動でバッハの作品を読み解く際に重要となる、動機の変化のさせ方の説明を、一斉指導で行った。その後、創作を行ったところ、すべて4分音符にしたり、音程を維持せずに適当な高さにしたり、音を乱雑に並べたりと、音楽が得意な生徒2人を除いて、動機を全く無視した旋律となってしまった。これらのことから、音程が関係する模倣や反行、音価が関係する縮小や拡大を、「MuseScorePortable」の画面上の5線譜を見ながら思考し、さらに音を確かめながら自分の思い通りの音にしていくという作業は、音程や音価についての知識が少ない生徒にとって困難であることがわかった。これらの課題を解決するために、音程と音価の問題を解決することが最優先にし、あえて音を気にせずに創作活動を行い、できあがった旋律を「MuseScorePortable」で確かめて修正を行うことにした。

2時間目は、前時での課題から「MuseScorePortable」を使用せず、動機の音程を変えずに音の高さを変えるために、半透明のシートに動機を印刷し、五線譜上でそのシートを動かしながら音を決める作業に変更した。シートを上下に動かすとシフト、横軸で回転させると逆行、縦軸で回転させると反行であると説明した。「逆行したのをシフトさせていいのですか？」と問う生徒がいたため、「逆行の反行のシフト、縮小の逆行の反行などもある」と補足した。すると、「さらにシフトもするとすごくない？」と、主体的に創作活動を行う姿が見られた。また、基本となる動機をどのように変化させたかを理解させるために、ワークシートに変化のさせ方を書かせた。これにより、動かしたシートをただ写す活動で終わるのでなく、基本となる動機に対して、自分の旋律がどのように変化してできたのかを考えさせることができた。また、調性についても理解させるために、「小フーガはト短調なので、ソの音で始まってソの音で終わるのが理想です」と補足した。できあがった旋律を比較させたところ、「全然逆行を使えなかった」「縮小を多く使ったら大変だった」などといった自己への評価や、拡大のみを使っていた旋律に「これじゃあ、つまらなくない？」などの他者へ評価する姿が見られた。このような姿から、音から一度離れた状態で、限られた音程と音価のなかで、動機を変化させながら旋律を組み立ててく作業は、楽譜を読むことに苦手意識がある生徒に対しても有効であったと考える。

3時間目では、前時に創作した旋律を「MuseScorePortable」に打ち込み、音を確認する作業を行った。1時間目では音価が課題であったため、「旗の数（8分音符なのか16分音符なのか）を間違えないように」と伝えた。生徒たちは音価に注意しながら、順調に活動を進めることができたが、しばらくすると「全部打ったはずなのに、休符が出てくる」や「自分の楽譜と違うリズムになる」というつぶやきが多く聞こえてきた。これは付点を付ける音符が間違っていたのが原因であった。前時にシートを使った際に、動機を逆行させると、付点の位置が左右逆になってしまい、付点がつくべき音符の隣の音符に付点をつけてしまったのである。「付点がどの音符についているか、もう一度よく見て確認しよう」と補足しながら、付点の位置を確認したことで、ここでの問題は解決できた。前時のシートで決めた音を写譜する活動は、音価を理解させたいうで行う必要があることが明らかになった。自分の旋律を実際に音にしてみたところ「この場所の高さを変えていいですか」と質問されたため、「小節内での音程間隔が変わらないように、一つずつ音を変えていきましょう」と指示したが、1時間目と同様に、音程を考えながら正確に音の高さを変える作業は困難であり、この生徒は自分が考えたような旋律にすることができなかった。

最後に、お互いに聞き合う活動を設定した。キーボードを使った活動と違い、積極的に自分の作品を聴かせ合う姿が見られ、ICTを活用することはお互いの作品を比較鑑賞する場面でも有効な手段であったと考える。また、学習支援システムにより画像共有ができるため、無作為に選んだ4人の作品を一斉送信し、全員で批評を行った。極端な跳躍がある旋律では笑いが生じ、変化のない旋律では反応が薄かった。そこで、旋律がゆるやかに上下し、縮小や拡大などのリズム変化に富んだ作品を一斉送信し、「突然高くなったりするの

も面白ですが、緩やかに上下すると自然な流れになるし、リズムの変化も動きがあつていいですね」と補足すると、「これ誰がつくったの」「すごい」といった歓声が沸いた。これらの反応から、お互いの作品を比較鑑賞したことで、旋律の自然な流れを感受することができるようになったと考える。

おわりに

1 聴覚情報から対位法として「小フーガ」を聞く

「小フーガ」は、聴く視点を提示することにより、聴覚情報からパイプオルガンの音色を味わうことができ、旋律の現れ方や重なりなどの対位法に曲を知覚することができる。しかし、調性的な視点からフーガを理解することが困難であることが課題である。

2 「小フーガ」の動機を生かした創作活動

音価や音程についての意識が高まり、対位法的手法を体感するためにも、創作活動が有効であったと考える。この活動が再度「小フーガ」を鑑賞する際にどのように影響してくるか、検証できていないが、創作活動を通して、音楽の流れを視覚的にもとらえることができるようになったと考える。

3 対位法で書かれた曲の比較鑑賞と楽曲分析

まだ実践を行っていないが、楽譜を読むことに苦手意識がある生徒に対して、動機のシートを用意するなどの支援を行う予定である。初めて「小フーガ」を鑑賞したときと、最後に鑑賞したときでは、曲の聴き方がどのように進歩（進化）したのかを書かせ、自分自身の変容にも気づかせたい。

参考文献

石桁真礼生「楽式論」東京：音楽之友社、1949.

長谷川良夫「対位法」東京：音楽之友社、1955.

クヌート・イエッペセン「イエッペセン対位法—パレストリーナ様式の歴史と実習—」東京：音楽之友社、2013.

山口博史「パリ音楽院の方式による厳格対位法」東京：音楽之友社、2012.

小鍛冶邦隆「作曲の技法—バッハからヴェーベルンまで—」東京：音楽之友社、2008.

ヨハン・フィリップ・キルンベルガー「純正作曲の技法」東京：春秋社、2007.

ディーター・デ・ラ・モッタ「大作曲家の和声」東京：シンフォニア、1980.

付録1

第2学年5組 音楽科学習指導案

平成29年12月1日5限

指導者 早川 克善

(場所 多目的教室1)

1 題材名 フーガの特徴をとらえ、パイプオルガンの音色を味わおう
(教材「小フーガト短調」「インベンションI」「動機を生かした旋律をつくらう」)

2 題材の目標

- ・パイプオルガンの音色や構造に関心をもって鑑賞することができる。
- ・多声音楽における旋律やテクスチャなどから、音楽の特徴を聞き取ることができる。
- ・創作活動を通して反復、変化、対照などの構造を理解し、音楽表現するための技能を身につける。

3 生徒と題材

(1) 生徒の実態について

これまでの鑑賞では、感じたことを熱心にかくことができるが、漠然と感想を述べるだけで、なぜそのように感じたのかという根拠まで考えることができる生徒は、クラスの25%程度であった。この結果は、表現や技能中心の授業に偏ってしまっていることや、音楽を形づくっている要素を曲想と関わらせながら鑑賞したり、それらを活用したりする場面が少ないことが原因と考えられる。そこで、鑑賞の途中で、動機を生かした旋律をつくる創作活動を行い、反復や変化、対照などの構造を創作の中で理解し、再度鑑賞したときに、漠然とではなく、より旋律の変化に着目して聴くことができるようにする。

(2) 題材の構想

第2学年の鑑賞教材「小フーガト短調」において、鑑賞の途中で動機を生かした旋律をつくる創作活動を行い、再度鑑賞したときに、旋律の変化に着目して聴くことができるようにする。

①対位法として「小フーガト短調」を聴く(1時間目/全4時間)

映像を見ながらパイプオルガンの音色や、楽器の構造を理解しながら、「小フーガ」を鑑賞する。次に、主題に着目し、対位法的な視点から「小フーガ」を鑑賞する。フーガ

体位法楽曲の鑑賞と創作の一体化

は主題が追いかけるように現れることを確認した後に、カエルの合唱をする。カエルの合唱もフーガと同じく主題を追いかけることが特徴であるが、厳格に模倣しているものであり、フーガは主題以外の旋律が出てくるなど、より自由な形式であることを理解させる。まとめとして、フーガの重要な要素が“旋律”であることを確認し、次の創作活動へ繋げる。

②「小フーガ」の動機を生かした創作活動（2、3時間目）

創作教材である「動機を生かした旋律をつくろう」の活動を鑑賞間に行い、バッハが多くの楽曲で用いている対位法的手法（複数の旋律を、それぞれの独立性を保ちつつ互いに調和させて重ね合わせる技法）である、主題の模倣（本教材ではシフトとする）、反復、逆行、反行、縮小、拡大を、創作活動を通して理解させる（本教材では反行を扱っていないが、バッハの作品では反行が多く使われているために、反行も加えることにした）。ここでは、「小フーガ」の動機（ここではG、D、B、Aの4音）を用いることで、鑑賞教材と関連づけながら創作活動を行えることを期待する。

これまで創作活動の際には、キーボードやリコーダーを用いながら、音を確認する活動を行ってきた。しかし、一部の生徒を除いて、自分の書いた楽譜通りに演奏できないという技能面の問題が生じている。そこで、本実践ではフリーソフトである「MuseScorePortable」を活用することで、これらの問題の解決を試みる。

③対位法で書かれた曲の比較鑑賞と楽曲分析（4時間目 本時）

“動機の変化のさせ方”に着目するために、「蟹行カノン」を鑑賞する。その後、楽譜を提示し、この曲が創作活動で活用した逆行によって構成されていることを理解させる。次に「インベンションI」を鑑賞する。楽譜を見ながら、2声に渡って現れる旋律が、動機をどのように変化してできた旋律なのか楽曲分析を行う。楽譜を見ながら楽曲分析を行う活動を初めて行うため、グループで対話しながら分析する時間も設定する。最後に「小フーガ」を、楽譜を見ながら鑑賞する。楽譜に対して苦手意識をもっている生徒でも、創作活動と比較鑑賞によって習得した知識を活かしながら、「小フーガ」を耳からの情報だけでなく、楽譜による視覚的情報によってもフーガが多声部による旋律の模倣で構成されていることに気付くことを期待する。

4 評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
①音楽を形づくっている要素（音色、旋律、テクスチャ、形式や構造）と曲想との関わりに関心をもち、鑑賞する学習に	①音楽を形づくっている要素を知覚し、音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの	①音階などの特徴を生かした音楽表現をするために必要な技能（音の組合せ方、記譜の仕	①音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を受している。

<p>主体的に取り組もうとしている。 ②、音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりに関心をもち、音楽をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。</p>	<p>構成や全体のまとまりを工夫し、どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもっている。</p>	<p>方など) を身につけて旋律をつくっている。</p>	<p>②知覚・感受しながら、音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりを感じ取って、解釈したり評価を考えたりし、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。</p>
--	--	------------------------------	--

5 本時の学習

(1) 本時のねらい

- ・多声音楽の旋律の現れ方や旋律の特徴を、楽譜から読み取ることができる。
- ・旋律やテクスチャなどの音楽を形づくっている要素から、音楽の特徴を聞き取ることができる。

(2) 本時の展開

	学習内容	○学習活動 □支援	形態	評価
<p>導入 10分</p>	<p>・創作活動で活用した“動機の変化のさせ方”を確認する。 ・「蟹行カノン」を聴き、楽曲の謎を考える</p>	<p>○自分が創作した楽譜と教科書を見ながら、反行、逆行、縮小、拡大、反復、シフトを確認する。 ○曲を聴いた後、楽譜を見ながら、楽譜を見ながら謎解きをする。 □前時に使った、逆行が使われていることを理解させる。</p>	<p>一斉</p>	<p>活動の様子 【関心①】</p>
<p>展開 20分</p>	<p>・「インベンション□」を聴き、楽譜を見ながら、それぞれの旋律が、反行、逆行、縮小、拡大、反復、シフトのどれが使われているのかを考える。 ・インベンションの旋律の特徴をまとめる</p>	<p>○曲を聴き、2声の対位法で書かれていることを理解する。 □わからない生徒に対しては、動機のフィルム（創作で使用した物）を使いながら考えさせる。 ○意見交換しながら、動機の変化を考える。 □動機を変化させながら旋律をつくっていることを確認する。</p>	<p>個人 ペア 一斉</p>	<p>楽譜への記述 【鑑賞①】 楽譜への記述 【鑑賞①】</p>

体位法楽曲の鑑賞と創作の一体化

15分	<p>・旋律に着目しながら「小フーガ」を鑑賞する。</p> <p>・「小フーガ」の魅力を批評文としてまとめる。</p>	<p>□主題の提示の仕方や、調性、エピソード（主題と主題のつながり）に注目させ、拡大した楽譜を見ながら聴かせる。</p> <p>○「小フーガ」の魅力を批評文としてまとめる。</p>	<p>一斉</p> <p>個人</p>	<p>ワークシートの記述【鑑賞□】</p>
まとめ5分	<p>・「小フーガ」のとらえ方の変化についてまとめる</p>	<p>○最初の鑑賞時と比べて、曲のとらえ方で進歩したところをまとめる。</p>	<p>個人</p>	<p>ワークシートの記述【鑑賞□】</p>

付録2 授業構想シート

①授業構想の背景

鑑賞の授業において、〔共通事項〕を習得させ、グループによるFTで鑑賞に対話を取り入れることで、深い学びの実現を目指してきた

②現状

ポリフォニーにおけるテクスチュア理解が不十分である。

□解決の手立て

- ・鑑賞の途中で、動機を生かした旋律をつくる創作活動を行うことで、再度鑑賞したときに、より旋律の変化に着目して聴くことができるようになる。
- ・対位法で書かれた曲を比較鑑賞や楽曲分析をすることで、旋律やテクスチュアを意識しながら曲を聴くことができるようになる。

④単元

小フーガ ト短調

⑤単元のねらい

パイプオルガンの音色を味わい、旋律やテクスチュアなどから音楽の特徴を聞き取ることができる

⑥単元のながれ

第1時 【鑑賞】

○パイプオルガンの音色を味わう

- ・小フーガを聞き、パイプオルガンの音色を味わう
- ・パイプオルガンの構造を理解する
- ・対位法の視点で小フーガを聴く

第2時 【創作】

○動機を生かした旋律をつくろう

- ・自由に選んだ数字をもとに動機を作る
- ・反行、逆行、縮小、拡大、反復、高さを変える工夫をして旋律をつくる
- ・できた旋律を紹介し合い、他者がどのような工夫（反行等）をしていたかを考える

第3時 【鑑賞】（本時）

○旋律やテクスチュアに着目して小フーガの特徴を聞き取る

- ・バッハの対位法の仕掛けを読み解く
- ・小フーガの旋律やテクスチュアから音楽の特徴を聞き取る

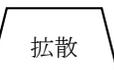
⑦本時のながれ

<流れ>

<学習活動>



「蟹行カノン」を聴き、楽譜を見ながら仕掛けを考える
前時に使った、逆行が使われていることを知る。



「フーガの技巧」を聴き、楽譜を見ながら、それぞれの曲の旋律が、反行、逆行、縮小、拡大、反復、シフトのどれが使われているのかを考える。



グループに分かれて考える

複雑な構造になっている中にも、美しい響きになるように作られていることを確認



旋律やテクスチュアに着目して、小フーガを聴き、批評文をまとめる